

Uターンで地元森林組合に就職し16年が経過しました。当時を振り返ると、山の景気が悪い中にあつても景気の良かった昔を知る職人や先輩がいて、林業に希望を抱く事ができた時代であつたと思えます。そこで聞かされた話は難しい理屈ではなく、今まで当たり前前に営んできた林業の歴史であり、ものづくりに誇りを持った生きた言葉だつたように思います。

時が流れ、世代交代が進み、後輩を指導する立場になつた時、林業を取り巻く環境がここまで悪化していたのかと、危機感を覚えた事を今でも鮮明に思

緑のエッセー

い出します。ちょうどその頃、ある方との出会いで大きく考え方が変化しました。広葉樹の森のつくり方を教えていただいた事が出会いのきっかけでしたが、そこで林業を発展させる可能性を見出す事ができ、前向きに林業と接するようにもなりました。

一般的には、針葉樹でも広葉樹でも森をつくるには、山に苗木を植える事から始まりますが、本来の森づくりは、苗木を植える前から始まっています。森林の環境は多様で、私の住む紀伊半島では500種類を超える樹木が自生しています。これらの樹木は偶然そこに自生しているのではなく、場の条件に

じて棲み分けをし、生きています。林業用語に「適地適木」という言葉がありますが、場に応じた森をつくる事が、樹木そのものの価値を高め、生産コストを低減させる事ができるという考え方です。従つて、森をつくる前には、場の条件を判断し適切な樹木を選ぶ植栽設計が極めて重要になります。

しかし、理想を追い求めるだけでは林業を営んでいく事ができない厳しい現実があることもまた受け止めなければなりません。問題は大きく3つあります。

一つ目は、今ある人工林の適正な管理と利用です。適地適木に触れましたが、既存の人工林には適地か



●プロフィール
昭和46年8月、三重県生まれ。
鈴鹿工業高等専門学校卒業後、民間企業を経て、平成10年に宮川森林組合に入社。
林業全般を経験して林業振興課長として現在に至る。
近年は、間伐を中心とした木材生産業務に注力する一方、地域性苗木の生産から、新たな防鹿対策の実証及び、広葉樹による森づくりを実施。

スギやヒノキの人工林資源を指す事が一般的でしたが、これからは、多様な森林資源ニーズを把握し、多様な環境に応じた多様な森林資源を生産する林業に発展させていく事が求められると考えています。

三つ目は、二ホンジカの問題です。二ホンジカは森林に環境的・経済的被害をもたらしています。苗木を植えても二ホンジカの被害で森になりません。これまでの二ホンジカの対策は、造林地の外周を柵で囲う方法と苗木毎に筒状の資材を被せる方法がありました。しかし、これらの方法では様々な不都合が生じ、森を作る事は極めて困難な状況です。そこで7年前

ら外れてつくられた森もあります。私の働く地域のそうした森では、スギノアカネトラカミキリによる虫害頻度が高く、無垢の建築材に利用出来ないため、安価で取引されてしまっています。このような人工林は今後、コストと時間を掛けて維持管理すべきなのかを、考える必要があります。人工林の平均樹齢が50年を超え、収穫時期に到達して明らかになってきた現実を受け止め、人工林資源の有効利用の手法を検討する必要があります。

二つ目は、林業を営むための経済的価値を高めた森づくりです。林業の経済資源としては、これまで

から新たな二ホンジカ対策として、パッチディフェンスと呼ぶ手法を先駆的に実践し、良好な結果を得られています。したがって、森づくりには、適切な二ホンジカ対策を講じる必要があります。

かつて林業に夢と希望があつた時代に作られた人工林資源を適切に利用し、次の世代に価値の高い森林を引き継ぐ事が、現在の林業に携わる者の役割であると考えています。林業はすてたものじゃないと後輩に伝え、仲間とともに林業を発展させ、メイドインジャパンの森づくりをめざしていきたいと思つています。